

オープンミーティング

日時 2022 3 月 19 日の 15:00~16:30

テーマ 「1 年間で探求の共同体をどうつくるのか？」

提題者 金澤 正治 兵庫県小学校教員

司会 城野 知佐 大阪教育大学附属平野小学校

参加者は全員で 9 名

最初に参加者の自己紹介

発表

1 年間で探求の共同体をどうつくるのか？

自己紹介

仲彬寿 京都府小学校 p4c の実践本を読んでみて興味をもちました

古見豪基 埼玉県小学校 いつも耳だけですいません。勉強させていただきます。

キノシタエイイチ 大阪府 IT 教材

岡田明香里 静岡県出身(愛知県下宿) 1 年間で子どもたちがどう変わっていくのか、お話を聞けることが楽しみです。何卒よろしく願いいたします。

茅野克利 徳島県 高等学校 今回は耳だけの参加とさせていただきます。本当はちゃんと参加したいのですが、やむを得ず、部分的に聞くだけになりそうです。すみません。

滝澤隆幸 新潟県小学校 p4c に興味があります。よろしく願いします。

発表

1 一年間で探求の共同体をどうつくるのか？

通常の研究授業では、一時間の授業をどうするか、発問等が話題となるが、資質能力をつけるということになれば、一年間でどういう能力が身についたかということが問題となる。

対話を中心にした学習活動をしたいという思いがずっとあった。そのためにはどうすればいいか。これまでは学級を支持的風土に作り変えるということが言われてきた。

2 点と線と面

この時、点と線と面ということを手掛かりに考えていることが多い。

点という場合は、一人一人の子どもが均等に発言できる授業を作るという考え方。

線という場合は、つないでいこうとする授業、こうすれば議論が進むと思われるような授業を作るという考え方。

面という場合は、点と線とくれば次は面となるわけだが、これは探求の共同体というものだと考えている。

実際の授業では、点に重きを置くか、線に重きを置くかを常に考えている。それはクラスの状況にもよるし、時期にもよる。例えば、一学期は点を中心に、二学期には点を線にして、点を補完するような形で授業を展開する。点と線のバランスをうまく取りながら、授業をしていくと、探求の共同体となって、面が現れてくる。三学期にはこの面における展開が授業で起こってくる。

このようなイメージでずっと授業をしてきている。

2-1 点を認める

2-1-1 点とは何か

点とはクラス一人一人の子どもであるという考え方と、一人一人の子どもを受け入れるという二つの考え方がある。後者は大変難しい。子どもはいろいろな行動をするので、あの子はこのような行動の傾向があるというようなレッテルを教師は貼りがちである。教師にとって多面的に子どもを判断することはやはり難しく、ある種のフィルターを通して子どもを判断しがちである。

2-1-2 点を認めるとはどういうことか

P4C を試してみても気がついたことは、自分がレッテルを貼って見ていた子が意外な発言をしたり、自分を驚かしたりするような発言をすると、その子に対する見方が変わってくる。こうして、一人一人の子どもを受け入れるという態度が生まれる。これは子どもの視点に立てば、「聞いてもらえてうれしかった」となる。

授業をしていると、授業を進めるのに一生懸命になり、子どもが適切な発言をしてくると、次、行こうとなってしまうと、子どもの発言を受け止めるということがあまりない。このような教師の対応のあり方に対する反省というのがかなり大切ではないか。授業がうまいというのは、子どもの発言の受け止め方がうまいのであって、教え方というより、聴き方がうまいということではないか。

2-1-3 認められるとどうなるか

みんなに自分の話を聞いてもらえた喜び、充足感を味わえる。

2-1-4 実践事例：学級開き

内容：学級開きでコミュニティボールを作る

目的：インテレクチュアル・セーフティー 知的安全を創る

留意点：ゆっくり。せかさない。

P4C を始めた最初の頃はコミュニティボールを使っていなかった。ハワイの p4c を知って、実際に使うようになってその良さを実感するようになった。

従来、支持的風土と呼ばれていたものに対応すると思われるインテレクチュアル・セーフティー（知的安全）が創出されることを実感することになった。

学級開きで自己紹介をするケースが多いと思うが、普通は子どもが一人ずつ前に出てきて、新しいクラスの中で、みんなの前で話すという活動になる。しかし、このような自己紹介は、前に立たされた子が、緊張のあまり、うまく言えなかったりして、楽しい経験とは言えない。教師も自己紹介する子に対して、もう少し大きな声で言ってくれるとか、自己紹介の内容を考えてこなかったのかと言う場合が多い。このような場面では、子どもは自分の話す番が気になってしまって、聴くどころではなくなっている。これでは自己紹介は台無しになる。

このような場面では、コミュニティボールを使うことは有効である。車座になって、床に座って、今はまっていることを紹介しながら、コミュニティボールを一緒に作っていくことは、みんなで学級を創っていく最初の共同作業として非常に有効である。なぜなら、自分の話を聞いて欲しい、みんなの話を聞きたいという探求の姿勢が生まれ、知的安全が育まれるからである。

2-1-5 対話のルール

同時に、コミュニティボールを使った対話のルールも子どもたちに伝えていく。つまり、

「毛糸を巻きつけてボールを作っている人だけが話すことができ、他の人はその子の話を訊く」

である。

また、自分の発言に対する理由を述べることが大切である。最初は、教師が自分のはまっていることの紹介をし、その理由も伝える。（自分の場合はアニメと決まっている。これが子どもには安心感を与えている）

子どもがはまっていることを話す場合、例えば、「サッカーにはまっている」と紹介して、ボールを隣の子に渡そうとしたら、教師は、「どうしてサッカーにはまっているの」とその理由を尋ねる。そうすると、子どもは自分のはまっていることを紹介した後、その理由を述べるようになる。これが、自分の発言がはっきりとしてきて、聴いている相手にも分かりやすくなるということを子ども自らが発見し、他の子どもの場合でも、理由を尋ねるようになっていく。

2-1-6 安心感

輪になった場合、隣に友だちがいるということ、毛糸を巻いていくのを手伝ってくれるということなどが、発言する子に安心感を与える。

ボールを持っている子だけが話すことができるということが徹底されていくと、ゆっくりと話すということが自然と身について行く。

（参照。 <https://kansai.p4c-japan.com/docs-jp/guides/> [P4C in schools KANSAI-JAPAN, 参考資料、P4Cの手引き、「学級開きでコミュニティボールを作ろう」]）

2-1-7 教科において「点を認めること」

「点を認める」ことを、教科の授業で行う。一人一人の子どもが発言する機会を多く作り、クラスみんなで聴く授業活動を取り入れる。

例えば、国語では音読が最初にあるので、それをこどもにさせる、また感想を話させる。この場合、手を挙げさせるのではなく、いきなり指名して、何か思ったことを言ってみてと促す。

これが「点を認める」ということであるが、その際には、教師の聴き方が大切。たまには板書をせずに、子どもの方を向いてゆっくり全体を感じながら聞く、みんながきちんと見ているかを確認したり、黒板を離れた所へと移動したりして、視線誘導をする、そして、子どもが話している人の方を見る習性を養う。このようなことを早い段階でする。

2-2 点をつなげて一線にする

2-2-1 線とは何か

一人一人の子どもの発言をつないでいくこと

探求の共同体をつくるための第一歩、土台となるもの。

2-2-2 線を作っていく方法

2-2-2-1 朝の会

日番が交代で司会をし、スピーチをする。スピーチの時に質問をして話を聞き出す。そして、みんなで笑ったり、驚いたりする場を作る。聞きたいというモチベーションを育む場となる。これが探求の共同体の第一歩となる。

2-2-2-2 質問ゲーム

ペアで5W1Hを使いながら、相手の話を聞き出す。これは一人一人の聴く力を高めるというスキルであるが、それと同時に共同体をつくるツールとなっている。

年度末近くになって、司会が、例えば、「昨日ゲームしました。」と一言言えば、そうすると何人かが手を挙げて、色々な問いを出して聞いてくれる。司会はそれに答えていくことによって、みんなで話を聞いて、共有する場が作り上げられている。

2-2-3 授業実践例

2-2-3-1 コミュニティボールを使った道徳

やり方・形態

・クラス全員で一つのサークルを作る。クラス全体の共同体を作るということでは有効であるが、クラスの人数が多いと難しい。対話を振り返るという場面がない。深まりを求めた場合は弱いかもしれない。

・クラスを二つのグループに分けて、前半・後半グループで交互に行う。他のグループの対話をきくことができきる。メモを取りながら聞くということをしている。

このことによって、聴いて考えるという力がすごくつく。同じ教材で対話をして、違う話になる場合もあり、どうしたら対話が深まるかということを学ぶ上では、効果が大きい。しかし、デメリットとしては時間がかかる。

・通常の授業形態で、小さなコミュニティボールを用いて行う。これはコロナ禍で行った。45分で消化するには有効。

2-2-3-2 コミュニティボールを使わない道徳

・クラス全員で、教師の指名で行う（通常の授業形態）。このメリットは、会話の流れを作れるということがある。ファシリテートがしやすい。子どもにファシリテートの見本を示すことができる。子どもに聞き方を示すことができる。子どもが教師を見ていて、いくつかの聴き方があることに気づく。例えば、「もう一度言って」、「フーン」、「本当！」など。しかし、一方、これがデメリットになる場合がある。つまり、子どもはやはり教師の方を見てしまう。

コロナ禍で、輪を作れなくなって、かえって色々なやり方・形態のメリット・デメリットがあるということに気がつくようになった。そのメリット・デメリットを、年間を通してどう使い分けるか、どメリット・デメリットい分けができるようになった。

2-2-4 次の日の朝の帯タイムで振り返りをする

振り返りシートの今日の名言を3人紹介する。

発言を模造紙に書く。

発言例：毎回同じでも、新しい発見があるとは、どういうことだろうか。

作曲家の魂とは何だろう、みんなに聞きたい。

その中には、反対の意見も書かれている。反対の意見が出ているのを拾っていくと、考えが深まっているのが分かる。普段反対されることに慣れていない子も、反対意見に慣れていく。反対意見も出していいんだという雰囲気が生まれる。

あるいは発言例として出てくるのが、話し合いを盛り上げてくれた問い。子どもたちはこのような問いをいい問いと認識するようになる。

2-2-5 授業で行う

国語の物語の教材で行う

当初は、教師が範読して、行間に気がついたことを書かせ、その後話し合うという形で授業を進めていた。すると、問いを出してくれる子が出始めた。3学期にもなると、核心をつくような問い、教師が聞きたいと思っているような問いを出すような子も出てくる。そこから議論を始める。

物語文は最初から読んで順番に理解をしていくという手続きをとる必要がなくなる。核心を突くような問いが出されると、自然と物語の前の方を振り返ることが起

こる¹。そして、読みは深まっていく。今では、物語文の横を開けて、そこに気がついたことを書き込むようにさせている。そして、さらにその下には、子どもが出した問いについて議論した、発言記録を残すようにさせている。すると自分の考えを書くだけでなく、発言間の関係（同一、相違）を書くようになる。

2-3 線が面になる

対話する授業の振り返りをノート一面に書いてくる子が出てくる。

ある道徳の授業では、議論が「自由とは何か」ということで落ち着いていった。この時、自由と制限の話へと展開していき、一人の子が「制限のない自由はよくない」と発言。すると、その子に対して、4人の子が次々に手を挙げて問いを投げかけていった。すると、その子は4人の問いの一つ一つたじろぐことなく自分の言葉で答えていく。この時、教師は何もしていない。点繋がって線となっていたようなことが広がりを持っていつている状態が生まれる。このような場面を見ている他の子は、この状況を発言した子が問い詰められているという様には見ていないし、面白かったと振り返りシートに書いてくる子もいる。

これが探究の共同体になるということだと思う。

Q&A

Q：メリットとデメリットについて。本を読んだ限りは、円を作って行うのがいいけれど、今は円を作ってやるのは無理かな。他の方法のメリット・デメリットが気になる。

A：サークルにはやはりメリットがある。サークルは作った方がいい。しかし、サークルでできなかったが、実際サークルでやってきて、対話のファシリテーターの仕方も学んできた。これを踏まえた上で、現在の状況で他のやり方でやっているのだから、やはり、出来たらサークルは作った方がいい。

C：小学校1年生の何を書いてもいいという振り返りで、「今日はいつものとは違うやり方でした。輪になっての話し合いでした。みんなの声が聞きやすいし、みんなの表情を見て嬉しい気持ちになりました。」というのがあって、面白いと思いました。

A：皆の顔が見れるというのは、子どもには新鮮なイメージを与えている。

C：このような発言が最後に出てくるまでには、何かがあるような気がする。

Q：サークルになって相手の顔が見える。コの字型でもできるのでは。これとサークルで

¹ここは非常に面白い。物語文は一つの流れの中から結論に当たるものが出てくるという形態が普通と思われるが、子どもの核心をつく問いは、物語の本質をとというものであり、そのように問う場合、「なぜなら～だから」という形で、物語の前の部分を理由として述べるということになる。

これはよく言われるように、日本語の発話形式と英語の発話形式の対照を表しているように見える。

するのとはまた違った感じがするのですか。

A：両者の形態の違いは、机があるか無いかですね。コの字型は机がある、サークルは机がない。机は子どもを縛っているもの。机は子どもにはじっと座らされているという抑止力になっているのではないか。机がないと身体的に心許ない。机がない方が、垣根がなくなる。親密度が深くなる。その方が自由に表現するようになるのではないか。椅子に座るよりも、やはり車座になって座って話す方が、聴いている度合いが違うし、親密度は増す。その方が、自由に自分の思いを表現することができるようになる。しかし、コの字型そのものがコロナのせいでできなくなっている

Q：ハードルを下げているのではないか。趣味を聞くよりも、はまっていることを聞く方がいいな。趣味を聞かれても、別にとか、分かんないという返事が返ってくるけど、はまっていること、何とか休みの日に何しているのと聞かれると、ゲームしてるとか、結構寝てるかも、それが趣味なのかなーってという会話になっていく。朝の会で、発言を教師が書くのか。

A：発言を模造紙に書く。あー、これ深いなーといった発言を書いている。会話が深まったのはこの問いだよ、という感じで書いている。また、それにつながるような発言も書く。廊下に貼る。どんな話が面白かったなどと聞くと、色々発言が出てくるので、よく聴いていたねと返してあげる。議論の時に発言せずに、書いてくるだけの子もいるので、そういう子のも書いてあげる。

Q：模造紙は教室に掲示しますか。

A：模造紙は、縦長のロール紙。これを掲示し始めたのは、周りの先生に何をしているかを知ってもらうためだった。これを廊下に貼る。名言を貼っていけば、子どもも、こういう発言をすれば、名言になるんだと思って、それを狙ってくる子もいる。これは、板書と比較される。ロール紙に書いていくのと板書では、やはりそれぞれメリットとデメリットがあると思う。

C：模造紙に書くというのは、オーストラリアの P4C の授業で知ったのですが、何を模造紙に書くかという、子どもたちが、いい発言とか面白い発言と見なすものは、みんなで手をたたいてあげ、その発言の評価をしたうえで、それを模造紙に書いて、今日の名言として教室に掲示する。また、名言として取り上げる場合、議論の時には発言しなかったり、何か感じられる子どもの書き込みを取り上げて、コミュニティーに参加を促すということも考えられるのではないか。

A：名言は、自分で選んでいたが、子どもに選ばせるという方法があるというのは面白いし、名言を取り上げる場合、重複しないようにしているし、あまり発言をしなかった子のも、それを取り上げて、認めてあげるといことはしている。

C：議論の中身だけでなく、面となる場を作っていくことが大事ではないか。このような場ができてくれば、普段手を挙げないような子も発言していくようになっていくのではないか。

A：実際国語の授業では、あまり発言しなかった子が、2回続けて発言したので、他の子たちが、オーと言って聞いてくれた。また、授業中にはほとんど発言しないが、議論をまとめたり、発言を記録したりするのが上手な子が、卒業する際に、P4Cは素晴らしいので、是非広めてくださいと言いに来てくれた。

C：普段あまり発言しない子が、P4Cを実践する中で、自分の意見を言いたい、みんなに聞いてもらいたいという気持ちになり、発言をすれば、他の子が評価してくれるという場面、つまりケア的場面が生まれるのではないかな。

C：P4Cでは議論が深まったり、議論の展開が論理的であったりすることが重要ではあるが、むしろ、ケア的場面がみられる授業の方が、評価は高いと思う。

A：確かにそういう場面はよく見られる。また、子どもが提示する例が豊かになっていく。

Q：オンラインでは哲学対話は成り立たないのか。画面越しが脳に与えるインパクトはどうなのか。対面では参加しにくい子も、オンラインでは参加しやすいのか。

A：対面とは違う授業ではないか。それでもオンラインと対面とはそれぞれやはりメリット・デメリットがある。例えば、対面ではほとんど聞き取れないこの発言も、オンラインでは聴き取れる。マスクをする必要がないので、顔が見える。

C：オンラインの可能性は検討してみる価値はあるのではないかな。